

「開かれた博物館」とは何だろう —市民の側から見た公立自然史博物館—

青島 睦治¹⁾

1. はじめに

「開かれた博物館」を目指すべきだということがしばしば言われている。それでは一体、博物館は今まで閉鎖的であって「開かれて」いなかったのだろうか。言うまでもなく博物館の展示や普及教育活動は広く一般市民を対象にしてきたし、博物館が生涯学習の場であることは今日では常識となっていると思われる。にもかかわらず「開かれた博物館」が今更のように話題に挙げられるのは、従来型のいわば行政から市民の側に一方通行的な博物館でなく、行政と市民が一体となって作り上げる新しい博物館像が求められていることを示しているのではないだろうか。

博物館が行う様々な活動の中で、市民との係わりという点において見た場合、展示や学校教育の延長的な発想での普及教育のみが従来強調されてきたように思われる。しかし、考えてみると、一般市民の博物館との係わり方にはもっと様々な形態があり得るはずであり、例えば次のようないくつかの段階があると考えられる。

- (1) 展示を楽しむという娯楽的な要素が強い段階
 - (2) 興味を覚えた事柄について積極的に学び、自らの教養を高めようとする段階
 - (3) 講座や観察会等に参加し、ある分野について通暁することを目指そうとする段階
 - (4) 自分の知識や技能を生かして、自らも楽しみつつ社会に貢献しようとする段階
 - (5) 博物館を拠点にして、専門家として社会に積極的に貢献しようとする段階
- このうち、従来からの博物館活動の中で既に十分

取り上げられてきた(1), (2), (3)は除いて、小論では(4), (5)に関する事柄を主として論じていきたいと思う。

ところで、博物館は展示や普及教育を行うだけではなく、資料の調査、収集、保管、研究を行う専門的な機関でもある。と言うよりも、後者の活動が基礎となって様々な博物館活動が展開できると見るべきである。このような専門的な分野についても一般市民に「開かれる」ことが可能であろうか。ほとんどの研究機関において、専門的業務はもっぱらその機関の職員によって担われる。時として、ほかの研究機関の専門家が協力することはあっても、一般市民がこのような業務に参加するということはまずあり得ない。これに対して博物館の場合には、専門的な業務を含めて一般市民の協力が可能だし、既に様々な形での貢献が行われていると思われる。さらに自然史博物館が今後必要不可欠の存在として社会に認知されていくためには、市民のいろいろなレベルにおける要求に応じていくこと、さらに市民がその活動に参加することによって広く社会に貢献する道が開けていくような博物館に成長していくことが求められている。このことはひいては自然史学自体が広く社会の中で市民権を得ていくことにもつながっていくであろう。

2. 自然史学が持つ性格

ほかの理科系の学問と比較して自然史学が持つ特徴の一つは枚挙的であることである。自然史学においては、一般に少数の事例から導かれた結論がすべての事象を説明できるとは限らない。つまり

1) 栃木県立博物館学芸部自然課：
〒320-0865 栃木県宇都宮市曙町2-2

キーワード：自然史博物館、自然史学、市民、アマチュア研究者、ボランティア

広く様々な観点から証拠を集め、総合的に推論していくという過程が必要とされるのである。そのためには、なによりも基礎となる資料の集積が不可欠である。にもかかわらず、このような基礎的なデータ集めが遅々として進んでいないというのが現状ではなかろうか。

例えば、栃木県産の化石の調査の現状について見てみると、従来かなりの数の論文が書かれている鍋山層のフズリナや第三紀層の貝化石についてすら産出する種類やそれらの時間的、空間的な分布が十分明らかにされているという状態からはほど遠い。また、標本がきちんと保管されているかどうか不明な場合が多い。まして、ほとんど手が付けられていない分類群も多いのである。

栃木県産の現生生物について見ても同様なことが言える。例えば維管束植物について検討してみると、産出する種はほぼ明らかになっているものの、それらの具体的な分布状態についてのデータはまだ限られているし、証拠標本もきちんとそろっていないと言いき難い。県単位の植物誌もまだ完成していない段階である。もっと目立たない生物については、おそらく限られた断片的な情報があるのみであろう。

自然史学は自然界に存在する森羅万象を数え上げ、それらの成り立ちや相互の関係を説明し尽くそうとする。現在の地球上にどれほどの生物種が存在するかの見積もりは人によって大きく異なっているが、既知の種が全体のごく一部にすぎないことは確かであろう。存在する種を識別し、記載し、系統関係を推定するという一見機械的な作業にすら膨大な時間と作業量が要求される。海産の線虫類を例にとると、現在の研究者数と一人当たりの新種の記載数から推定して、このグループの系統分類学的研究にある程度のめどがたつには5,000年が必要であるという見積もりすらある(白山, 1995)。このような状況が生まれるのはまず絶対的に研究者の数が不足しているからに他ならない。職業的研究者の数を増やすということはそれだけの就職先を確保するということである。これが現在の財政状態から考えて、極めて困難な状況にあるのは残念ながら論を待たない。だとすれば、今後の自然史学の発展のためには職業的研究者のみではなく「アマチュア」(研究職のポストについていないとい

う意味での)の活躍が大いに期待されることになる。自然史学は大がかりな実験設備や、高価な分析機器などが無くとも個人レベルで参加できる分野を多く含んでいる。従来、研究機関に所属しないアマチュアにとってネックになっていたことの一つは、文献や標本の所在等に関する情報の入手が困難なことにあつたと思われるが、これらについては今後のコンピュータネットワークの発展によって状況は改善されていくであろう。

日本の社会でこのようなアマチュア研究者が育っていく素地があるだろうか。例えば、大学あるいは大学院で自然史系の学問を専攻し、研究職に就くことを希望しながら就職難のためにやむを得ず別の職業に就いている人はかなりの数に上ると思われる。あるいは個人的趣味から出発して、自然史の何らかの分野において高度な専門的知識を備えるに至ったコレクターの存在も決して稀ではない。最近では環境アセスメント関連の企業などで実践面で鍛えられた専門家も育ってきている。日本の自然史系の博物館の多くはスタッフの数や設備などの点で大学より著しく劣っており、大学のように研究者を養成する機関として機能することは難しい。しかし、博物館が前述のようなそれなりの実力を備えたアマチュアに活動の場を提供し、彼らの研究の拠点になることは当然期待されてよいことではないだろうか。

3. 博物館ができること

(1) 普及教育

一般市民に自然史学のおもしろさを伝え、興味を喚起する場として展示や普及活動があるのは言うまでもない。不特定多数を対象とする展示はできるだけ面白くわかりやすいことが求められる。しかし、講座や観察会の場合いまひとつ焦点がしぼりにくい。初級向け、上級向け、さらにはボランティアや指導者養成といったいろいろなレベルに向けて分化を試みることも考えてよかろう。また、友の会組織などを通してより固定的な「博物館ファン」を獲得していく努力も必要であろう。

(2) アマチュアの研究活動への支援

「開かれた博物館」といっても展示場以外の場所は、例えば公立図書館のように誰もが思いついた

時にいつでも訪れることができる場所とも違うであろう。アマチュア研究者の受け入れのためにはそのための制度作りを考える必要がある。予算を要する事業の場合にはそう簡単にはいかないかもしれないが、生涯学習がこれだけ話題に挙がっている現在、決して無理な話では無いと思う。むしろ、内部の職員のコンセンサスを得ることの方が難しいかもしれない。どのような制度を作るべきかは、実際のニーズを調べてみることから始まるが、例えば次のようなことが考えられる。

- ・ 収蔵資料や図書の公開、貸し出し
- ・ 研究設備の利用の公開
- ・ 研究者や研修生の一定期間(長期)あるいは臨時的(短期の)受け入れ
- ・ 研究補助金制度
- ・ 館外の研究者も含めた博物館の調査事業(地域調査など)
- ・ 館の刊行物(紀要など)への論文の掲載

これらの項目の中のいくつかについてはすでに実施している館も多だろう。例えば栃木県立博物館の場合、調査研究協力員制度を作っており、調査旅費の補助を行っている(青島, 1991)。

これらは館外の個人を対象にしたものであるが、このほか、例えば博物館友の会内の自主的な研究グループやアマチュアの研究団体を支援することも考えられる。栃木県博の自然系ではまだ具体的な事例は生まれていないが、栃木県内での自然系の団体の例をひとつ挙げておく。今市市の歴史民俗資料館は自然系のスタッフをとくに擁しているわけではないが、市内のアマチュアの団体である「今市の自然を知る会」に活動の場所を提供し、職員が会計、データ処理などを行い、事務局の役割を果たしている。また、この会では市の補助を受けて「日光杉並木街道の植物」、「今市産蛾類図鑑」といった大冊の図書を資料館から刊行している(会員の名塚史雄氏による)。

現在の日本の社会においては、一般市民にとって公立博物館の敷居はまだ高いのではないかと思われる。その上、展示を見たり、講座に参加したりする以外に博物館を利用する方法があることに多くの人(ひょっとしたら博物館の職員を含めて)は気づいていないかもしれない。せっかく上述のような制度を作っても当面は空振りに終わる恐れ

もある。しかし、博物館ブームとも言われ、競って多くのユニークな博物館が作られている現在、展示と月並みな普及教育だけの文化施設にとどまっている博物館では、高い要求を持った市民からは見捨てられる運命にあることは確かであろう。博物館における研究を守り育てていくためには、広範な市民の支持を得ることが是非とも必要なのである。

4. ボランティアをどうとらえるか

最近、ボランティアが話題になることが多く、既に導入している博物館も少なくない。ただ、仕事の振り分けをどうするのか、どのように教育していくのかなど問題点も多いようである。私は博物館の場合、目的がはっきりしない漠然とした社会奉仕というセンスでのボランティアは必要ないと思う。また、行政の側が当然対価を払って行わせるべき職務を、単に経費の節約のためにボランティアに肩代わりさせるとしたら本末転倒もはなはだしいと思う。ボランティアという行為はあくまで自分自身は何らかの点で満足を覚えるからこそ長続きするのであって、それがたまたま何らかの点で社会の役に立てばよいのである。職員が不足しているからボランティアに手伝ってもらおうということではなく、仕事に興味があるから無償でもやりたいというのが基本だと思う。博物館の仕事に興味を抱くと言うことは、取りも直さず博物館資料とそれに基づく様々な活動への関心にもつながっていく。このような中から博物館における研究活動への協力者、支援者も生まれてくる可能性がある。このような見地に立てば、ボランティア活動はアマチュア研究者の養成ともつながり、前項に述べた館外研究者への支援とともに、専門的業務をも含めた形での「開かれた博物館」への重要なステップになるであろう。

5. おわりに

自然史学を学び、研究すると言うことは一般市民にとってどんな意義があるのだろうか。かつて19世紀、ビクトリア朝のイギリス社会で博物学が大いにもはやされた時期があったことはよく知られている(バーバー, 1995)。現代の日本でもちよっとし

た博物学ブームだと言えなくもない。自然史博物館が増えてきたこともそうだし、書店に行けば図鑑やフィールドガイドのたぐいが沢山並んでいる。余暇の増大や生きがいを求める退職した高齢者の増加も背景にあるのだろうが、都市化への反動としての自然回帰の傾向もまた生まれてきているのであろう。さらに経済効率一辺倒から環境重視への社会風潮の変化も徐々に進んできている。かつては一瞥もされなかった環境保護派の主張が行政を動かすようなケースも起こり始めている。ところで、自然史の研究は客観的なデータを提供はするものの、それ自体環境保護に結びつくものではない。環境問題は経済システムに根ざしている問題であって、環境保護運動は根本的には後のことも考えずにひたすら快適な生活のみを目指すという人間の目先

だけの欲望からくる偏狭な価値観の変換を迫るものである。一部に見られる自然志向のムードをこのような価値観の変換に結びつけていくことが可能であろうか。自然史研究者や自然史博物館が社会に積極的に貢献する道はこのあたりにあるのではないかと私は思っている。

参 考 文 献

- 白山義久(1995):生物多様性を深海底にみる.科学, vol.65, p.766-774.
青島陸治(1991):博物館の地域調査と普及活動.月刊地球, no.149, p.708-713.
リン・バーバー[高山宏訳](1995):博物学の黄金時代.国書刊行会, 431p.

AOSHIMA Mutsuharu (1998): What visitors expect public natural history museums to do.

<受付:1998年10月1日>